

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

玉置敦彦

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院法学政治学研究科博士課程綜合法政専攻

【研究題目】

軍事介入と非対称同盟—ベトナム戦争・アメリカ・アジア同盟諸国

【研究の目的】(400字程度)

同盟とは、国際政治学では対等な主権国家間で結ばれる攻守協定—対称同盟—と解されるのが通例であり、締結国の同意に基づく共通の脅威に対抗するための軍拡の代替策で、随時改廃可能な暫定協定とされる。しかし非対称同盟では締結国間に著しい軍事力の格差があるため、小国は大国からの軍事力の提供を受ける代わりに外交・内政の様々な分野における政策協調を行う。これは大国が小国の政策を実質的に拘束することへと接近するため、この点で非対称同盟は支配・統制を意味する「帝国」概念と共通点を持つ。このように非対称同盟は、同盟(合意)の変形でありながら、同時に同盟の対概念である帝国(強制)とも多くの特徴を共有しており、これが安易な概念的把握を拒む最大の要因となってきた。非対称同盟を形成する大国と小国の間に展開される政治力学を、合意や強制といった言葉に押し込めずに、いかに理解すればよいのか。「同盟」にも「帝国」にも還元しえない非対称同盟独自の政治力学を把握し、その実態を説明し得る概念と理論を模索するのが本研究の目的である。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、まず、同盟と帝国という言葉が、合意と強制というニュアンスを強く持って国際政治学の概念として確立していく過程を追跡し、同時にそこに収まらない多様な同盟論・帝国論が存在することを確認した。この学説史的検討の結論は、第一に、非対称同盟に焦点を当てた同盟論は大国と小国のどちらがどちらを操ったのかをめぐって議論を繰り返し、第二に、帝国論は大国が小国をどこまで統制できれば帝国と呼びうるのかをめぐって議論してきたということである。これは要するに、同盟論と帝国論は、非対称同盟を対象とする限り関心も議論も近似しているということであり、その焦点は、本研究が「力のパラドックス」とよぶ問題にあった。すなわち、非対称同盟とは、基本的には大国が小国に強い影響力を持つ「犬が尾を振る」状況なのに、なぜ、しばしば「尾が犬を振る」、つまり小国が大国の決定を左右するような事態が生じるのか、という問いである。これが本研究の設定する問いである。

この問いに対しては従来同盟政治論とよばれる分野から回答が試みられてきたが、そこでは大国の政策的失敗や小国外交の巧みさという個別的要素に問題が還元されてしまっており、長期間に、しかも多くの事例にまたがっている力のパラドックスを説明するには無理がある。非対称同盟独自の政治構造と力学を把握することが、この問題に理論的に答える上で必須なのである。

そこで、本研究では、非対称同盟独自の政治構造に関する理論を、帝国論の一分野である提携理論を基盤として非対称同盟の「提携モデル」として構築し、その政治力学の解明を試みた。提携モデルでは、非対称同盟は、大国と小国の二者関係ではなく、「主導国」、「追従国」の指導者である「提携者」、追従国内部で提携者と同盟に反対する「対抗者」の三者関係として非対称同盟を把握される。またその政治力学は、ベトナム戦争をめぐる米韓、米比、日米同盟の外交史的検討を通じて明らかにされる。この三つの事例では、提携者はベトナム戦争という共通の政策に対する協調が主導国から要求され、それと同時期にそれまで主導国が消極的だった対追従国政策が実施されている。ある時期に力のパラドックスが生じたある時点で消滅する過程が、同じ主導国の、同じ地域の、そして同じ政策への協調問題をめぐって観察できるのである。

【結論・考察】（４００字程度）

非対称同盟における力のパラドックスの発生は、提携モデルでは、主導国が軍事的保護・経済的援助を提供し提携者が主導国の政策に協力するという「支援供与と政策協調の交換」、提携者と対抗者の政治バランスである「提携者の安定性」、主導国の提携者の意図と能力への認識である「提携者の評価」という三つの要素から説明される。米韓同盟の事例を通じて示されるように、力のパラドックスは、提携者が供与と協調の交換において、主導国の支援供与の負担と政策協調要求の優先順位の差を利用する時と、対抗者の存在ゆえに、主導国が提携者の政策協調を得るために提携者の国内的立場を強化する必要があるときに発生する。また、日米同盟の事例が示すように、提携者の安定性の政治力学は、供与と協調の交換とは独立に存在し得る。主導国が提携者の安定性が損なわれた際に現れるだろう結果に対して深刻な懸念を抱いていた場合、提携者の政策協調ではなく提携者＝同盟の維持自体を目的として、主導国が一方向的に支援を決定するからである。そして米比同盟の事例が示すように、支援と協調の交換の力学にも、提携者の安定性の力学にも、両者の組み合わせにも、主導国の提携者の意図と能力への評価が影響する。以上のように、提携モデルは個別の政策の成否ではなく非対称同盟独自の政治力学から力のパラドックスの発生を説明できるのであり、これは同モデルの存在を実証するとともにその分析上の有用性を示すものだといえよう。